

大都市高齢者のライフスタイルとモラール

— 階層および居住地域との関連を中心に —

1. 課題の設定
2. データと指標
3. 分析
4. 知見のまとめと考察

木下栄二*

要 約

本稿は、1989年夏に実施した「大都市高齢者の文化創造に関する調査」（対象地区：目黒区と台東区）によって得られたデータをもとに、大都市高齢者のライフスタイルとモラールの関連について考察する。分析にあたっては、ライフスタイルの諸要素のうち生活拡充行動に注目し、地域参加型活動尺度と都市型趣味活動尺度という二つのライフスタイル尺度を構成した。そして、この二つの尺度とモラール尺度との間の関連を、特に社会階層と居住地域に注目して分析・検討を行った。主要な知見は以下の通りである。

①全サンプルについて、この二つの尺度とモラール尺度との関連をみると、都市型趣味活動尺度は有意な正相関が認められるが、地域参加型活動尺度は関連が認められなかった。

②階層ごとにライフスタイルの両尺度とモラール尺度との関連をみると、地域参加型活動尺度については、「低学歴」で有意な正相関が認められたが、逆に「高学歴」では有意な負相関が認められるなど、階層によって関連の仕方が同様ではなかった。都市型趣味活動尺度についても、低階層ほど強く関連する傾向がみられた。

③目黒区と台東区にサンプルを分けて同様の分析を行ったところ、地域参加型活動尺度については、台東区の「高学歴」「高収入」でも正相関の傾向がみられるのに対して、目黒区の「高学歴」「高収入」では有意な負相関が認められた。また、低階層ほど強く関連する傾向がみられた都市型趣味活動尺度についても、目黒区の「低収入」で関連が低い。社会階層によるライフスタイルとモラールの関連は、大都市の中の地域によっても同様ではなかった。

そして最後に、高齢者のライフスタイルとモラールとの関連について、上記の知見をもとに、高齢者をセグリゲートする階層における価値体系とライフスタイルとの適合性という観点から若干の考察を試みた。

1 課題の設定

東京都立大学都市研究センター「高齢社会研究」プロジェクト文化班では、「高齢者の新しいライフスタイル（元気で充実した生活、いわば生き生きとした生活のライフスタイル）をどう創り出していくかと、という問題」（高橋他、1990）を中心テーマにいくつかの調査研究を進めてきた。本稿では、その調査研究のなかから、1989年夏に実施した「大都市高齢者の文化創造に関する調査」（対象地区：目黒区と台東区）によって得られたデータをもとに、大都市高齢者のライフスタイルとモラルとの関連、そして関連を規定する属性について社会階層と居住地域を中心に考察する。

高齢社会の進展とともに、従来のように高齢者を「社会からの隠退者」や「社会福祉の対象者」として扱うだけでは不十分、不適切となり、高齢者を社会の主要な構成員として研究する必要性が生じている。特に、60歳台や70歳台前半位の所謂「若い老人（young old）」と呼ばれる人々に対しては、その経済力、身体的能力などの点からみても、まだまだ重要な「社会の構成員」として捉えるべきであろう。そしてこの視点は、彼らを他の年代の人々同様、多様なライフスタイルをもつ人々として研究する必要を要請する。

ライフスタイルの区分には、いくつもの視点が存在するが、本稿では、ライフスタイルを「生活行動の選好パターン」（松本、1986）と捉え、選択性が高く選好パターンが反映されやすい生活拡充行動に注目する。すなわち、生活費を得るための労働や、日常の生活を維持するための家事などとは区別された、生活をより充実させるための行動である⁽¹⁾。そこで本稿では、後述する諸項目より、2つの生活行動パターンを識別して、その相対的な行動頻度の尺度を構成する。つまり、二つの生活行動の類型と、その相対的な行動頻度によって「ライフスタイル」の一面を捉えることを試みる⁽²⁾。

それでは、生活拡充行動に注目して構成されたラ

イフスタイルの尺度、ある種の生活行動の頻度は、高齢者の生活、特に彼らの「元気で充実した」あるいは「生き生きとした」生活とどのような関連をもつのであろうか。「元気で充実した」あるいは「生き生きとした」生活をどのように捉えるかについては一義的に言えることではないが、本稿ではそれを高齢者の主観的幸福感の側面から捉えることを意図してPGCモラル尺度を用いる。そして、ライフスタイル尺度とモラル尺度との関連を分析することで、ある種の生活行動を行うことが、高齢者の生活にとってもつ意味について考えてみたい。

従来、高齢者の幸福感については、高齢者のモラルと「社会参加」あるいは「社会的活動」との関連を扱った研究が多い。そこでの知見は、基本的に活動理論⁽³⁾—人間はつねに社会的相互作用の中に組み込まれ、活動しつづけることが望ましく、老年期においても中年期からの活動を何らかの形で維持し、あるいは代替的な活動を探すものである—を支持する形で、「社会参加」「社会的活動」の程度の高さは、幸福感・モラルと正の関連性があることが指摘されている⁽⁴⁾。

ここで用いる生活拡充行動に関する項目は、従来の研究での活動量の指標と同一ではない。例えば、古谷野亘（1983）が「社会的活動」の指標として「社会関係指標」（親密さをともなう人間関係の量）を用いたように、特定の他者との相互作用を測るものでもない。しかし、生活拡充行動は広い意味での他者、すなわち社会とのかかわりなしには遂行できない。そこで、生活拡充行動とモラルとの関連については、活動理論を授用する形で、次のような仮説を設定する。すなわち「生活拡充行動を活発に（高頻度で）行っている高齢者ほど、モラルが高い」という仮説である。本稿では、基本的にこの仮説を検証する形で分析を進める。しかし、この関連自体、理論的検討を後回しにしたとしてもなお考慮しなければならない問題を含んでいる。

第一に、いかなる生活拡充行動でも上記の仮説があてはまるのか、という問題があり、ここにライフスタイルの観点を導入する価値が見いだされる。

すなわち、ライフスタイルが「生活行動の選好パターン」である以上、そこには複数のパターンの存在が想定される。いかなる行動パターンであっても、それはモラルと正の関連をするものであろうか。この問題は、高齢者が大都市で生きていくうえでの適切なライフスタイルの探索と関連する。どのようなライフスタイルを取ることが、高齢者にとってより適格的なのであろうか。本稿では、後述する二つのライフスタイル尺度とモラル尺度との関連を問うことで、この問題について検討する。

第二に、いかなる人々にとっても、上記の仮説が当てはまるのか、という問題がある。ライフスタイル自体、完全にランダムに選択されるものではない。それは多くの場合、何らかの構造的基盤に基づいて選択される。そして、この構造的基盤には、文化や価値の共有によってセグリゲートされる人々の集団からなる社会が想定される。そこでここでは、そのセグリゲートの基準として、特に社会階層と居住地域に注目し、階層別、そしてさらに特に地域別に、ライフスタイル尺度とモラル尺度との関連を問うことで、この問題についても検討を試みる。

以上のような視点と問題を設定したうえで、今回の報告では、次のような手順で分析を実施していく。まず①生活拡充行動に関する項目を、ライフスタイルに関する項目として整理し、そこからライフスタイル尺度を構成する。次に②第一の問題について考察するために、全サンプルを対象に、ライフスタイル尺度とモラル尺度との関連を分析する。そして③第二の問題について検討するために、社会階層に関してサンプルを分割して、分割された各サンプルごとにライフスタイル尺度とモラル尺度との関連を分析する。さらに④地域社会の特性に注目して、特に居住地域ごとにサンプルを分けた上で、階層ごとのライフスタイル尺度とモラル尺度との関連を分析する。

今回の分析は、研究の視点そのものが探索的な域をでるものではなく、また、分析結果も中間報告の域を出るものではないが、いかにしたら大都市における高齢者が「生き生きとした」生活をおく

れるか、という問題に取り組むための、基礎的な知見を提供できるであろう。

2. データと指標

2.1 調査の概要とデータの性格

分析に用いるデータは、1989年7月に、台東区上野周辺と目黒区都立大学周辺に居住する60才～75才までの男女から無作為抽出で選んだ1131人(台東区544人、目黒区587人)を対象に行われた調査による。調査方法は、構造化面接調査票を用いた訪問面接法であり、回収数は計566票(台東区274票、目黒区292票)、回収率は50.0%(台東区50.4%、目黒区49.7%)であった。尚、今回の分析にあたっては、ライフスタイルに関する質問項目に無回答のある4ケースを分析から除外し、最大で562ケースを分析対象としている。

この調査の概要については既に詳しい報告(高橋他、1990)がなされているので詳細は略すが、このデータの特徴的性格について2点だけ簡単に触れておく。第一に、対象者本人の健康状態についてだが、「非常に健康」46.8%、「健康だが無理はきかない」45.8%と、健康で元気な高齢者がマジョリティになっており、回収率が50%であったことを考えると、ここでのサンプルは大都市高齢者の全体像より、むしろ健康で元気な高齢者の実態に近い可能性のあることに注意しておく必要がある。

第二は、東京のなかでも性格の違う2地区を調査対象としている点である。地域別の格差は、家族・住居にはあまり現れてこないが、居住歴・職業歴・経済状況・生活意識にはかなりの格差が存在する。山手的な特徴をもち、勤労者世帯を中心とする目黒区と、下町的な特徴を残し、自営業者世帯を多く含む台東区という都市のなかでの地域差の存在も特徴的な点である⁽⁵⁾。

2.2 指標の構成

① 階層の指標

社会階層とは、資源の所有状況の不平等に関する

概念であり、その所有状況の多少によって人々を区分するものである。操作的には、通常、職種あるいは職業（威信）、学歴、収入などによって把握される場合が多い。しかし、本稿では、このうち学歴と世帯収入の二つの変数をもって階層の指標とする。これは、職種あるいは職業（威信）の重要性を軽視したものではなく、もっぱらデータ分析上の問題による。一つは職業活動から離脱した人々を多く含む高齢者層を対象とする場合、どの時点の職業をもってその指標とするかを確定することが論理的に困難であること、二つに、女性の職業的威信を評価することが技術的に困難であること、などという理由による。

表1. 学歴・世帯収入の地域別集計

①学歴	% (実数)		
	低学歴	中学歴	高学歴
台東区 (270)	41.9 (113)	40.0 (108)	18.1 (49)
目黒区 (288)	17.7 (51)	45.5 (131)	36.8 (106)
計	29.4 (164)	42.8 (239)	27.8 (155)

*無回答4ケースを集計から除外

②世帯収入	% (実数)		
	低収入	中収入	高収入
台東区 (237)	24.1 (57)	46.0 (109)	30.0 (71)
目黒区 (254)	21.3 (54)	39.4 (100)	39.4 (100)
計	22.6 (111)	42.6 (209)	34.8 (171)

*無回答71ケースを集計から除外

次に本稿で用いる学歴と世帯収入について簡単に説明すると、学歴については、「低学歴」（旧制小・旧制高等小・新制中など）、「中学歴」（旧制中・高等女学校・新制高校など）、「高学歴」（旧制高校・大学・大学院以上）の3区分を用いる。また、世帯収入は、「低収入」（年収300万円以下）、「中収入」（年収300～700万円）、「高収入」（年収700万円

以上）の3区分である。どちらも無回答のケースは、その都度分析から除外して用いる。両変数の地域別の集計は表1の通りである。

②ライフスタイル尺度の構成

ライフスタイル尺度の構成にあたり、表2に示す質問項目を利用する。但し、これらの項目は、始めからこのような尺度構成を目的に設定されたものではない⁶⁾。そこで、生活拡充行動であるか、あまりに少数派の行動ではないのか、という2つの観点から、生活拡充行動と考えにくいd, r, sの3項目、「殆どしない」「全くしない」の合計が90%以上のG, g, h, i, oの5項目の計8項目を除外し、残りの項目には「ほぼ毎日」=6、「週に1～2回」=5、「月に1～2回」=4、「年に数回」=3、「殆どしない」=2、「全くしない」=1という得点を与え、各項目間におけるピアソンの積率相関係数をもとにマトリックスを作成（表略）し、比較的内部相関の高い項目群を選択して、2つの尺度を作成した。

ひとつは、「F. 老人会・老人クラブでの活動」「J. 文化センターや老人会館の行事に参加」「B. 地域の仲間や団体とする趣味・学習・スポーツ」「E. 自治会・町内会や婦人会などの活動」「K. ボランティアや奉仕活動に出かける」の5項目からなり、その活動の地域性に注目して、これを地域参加型活動尺度と呼ぶ。

もうひとつは、「I. カルチャーセンター等への参加」「D. 地域や職場以外の仲間とする趣味・学習・スポーツ」「H. 文化講演会や市民大学を聞きに行く」「A. 一人でする趣味・学習・スポーツ」「c. 芝居や歌舞伎、音楽会に行く」「b. 繁華街のレストランや喫茶店で飲食する」の6項目からなり、居住地に限定されない都市型施設・専門機関の利用、人間関係の持ち方に注目して、都市型趣味活動と呼ぶことにする。

尚、尺度の構成にあたっては、各項目ごとに標準得点を求めて、その標準得点を加算して加算尺度とした。つまり、各項目の平均値をもとに、相対的頻度を構成したわけであり、この尺度は相対的頻度を示す。両尺度のレンジ・標準偏差・ α 係数は表3に示す通りである。

表2. ライフスタイルに関する項目の単純集計 % (実数)

	ほぼ毎日	週に 1-2回	月に 1-2回	年に数回	殆どしない	全くしない
A. 一人でする趣味等	25.4 (143)	21.0 (118)	10.7 (60)	2.8 (16)	17.6 (99)	22.4 (126)
B. 地域仲間や団体でする趣味等	1.2 (7)	9.4 (53)	8.2 (46)	3.4 (19)	17.1 (96)	60.7 (341)
C. 職場仲間や団体でする趣味等	0.2 (1)	2.3 (13)	4.3 (24)	7.8 (44)	12.6 (71)	72.8 (409)
D. 地域や職場以外の仲間とする趣味等	1.1 (6)	10.5 (59)	7.3 (41)	7.3 (41)	17.4 (98)	56.4 (317)
E. 自治会・町内会や婦人会など	0.4 (2)	3.6 (20)	10.3 (58)	6.8 (38)	13.0 (73)	66.0 (371)
F. 老人会や老人クラブでの活動	0.4 (2)	3.2 (18)	4.8 (27)	4.6 (26)	7.5 (42)	79.5 (447)
G. シルバー人材センター等	0.2 (1)	0.4 (2)	0.5 (3)	0.4 (2)	5.9 (33)	92.7 (521)
H. 文化講演会や市民大学	0.2 (1)	0.9 (5)	4.4 (25)	11.4 (64)	14.1 (81)	68.7 (386)
I. カルチャーセンター等	-. (-)	4.8 (27)	4.3 (24)	4.6 (26)	11.6 (65)	74.7 (420)
J. 文化センターや老人会館	-. (-)	1.2 (7)	2.7 (15)	8.0 (45)	10.9 (61)	77.2 (434)
a. 繁華街での買い物	5.5 (31)	20.1 (113)	34.2 (192)	15.1 (85)	14.1 (79)	11.0 (62)
b. 繁華街での飲食	2.3 (13)	14.8 (83)	32.9 (185)	18.0 (101)	18.5 (104)	13.5 (76)
c. 芝居や音楽会	-. (-)	0.9 (5)	12.1 (68)	39.0 (219)	22.4 (126)	25.6 (144)
d. 近所での買い物	43.4 (244)	27.2 (153)	12.1 (68)	1.8 (10)	10.1 (57)	5.3 (30)
e. 近所での飲食	2.7 (15)	9.6 (54)	19.9 (112)	10.9 (61)	24.7 (139)	32.2 (181)
f. 居酒屋や小料理屋	0.2 (1)	7.1 (40)	9.1 (51)	5.5 (31)	12.8 (72)	65.3 (367)
g. パチンコ	0.4 (2)	2.3 (13)	0.9 (5)	2.0 (11)	6.8 (38)	87.7 (493)
h. 碁会所等	0.5 (3)	1.4 (8)	1.8 (10)	0.2 (1)	6.4 (36)	89.7 (504)
i. 競輪・競馬	-. (-)	0.9 (5)	0.2 (1)	1.2 (7)	4.4 (25)	93.2 (524)
j. 宗教活動・教会活動	0.7 (4)	3.7 (21)	4.6 (26)	2.5 (14)	6.2 (35)	82.2 (462)
k. ボランティア・奉仕活動	1.1 (6)	2.1 (12)	4.1 (23)	4.6 (26)	9.6 (54)	78.5 (441)
l. 温泉や観光旅行	-. (-)	0.4 (2)	9.1 (51)	67.4 (379)	12.6 (71)	10.5 (59)
m. 神社や教会へのお参り	3.2 (18)	5.0 (28)	23.8 (134)	42.5 (239)	10.7 (60)	14.8 (83)
n. ドライブ	0.5 (3)	2.0 (11)	8.0 (45)	19.2 (108)	14.6 (82)	55.7 (313)
o. ジョギング	2.3 (13)	1.8 (10)	2.0 (11)	0.9 (5)	8.4 (47)	84.7 (476)
p. 散歩	24.4 (137)	19.2 (108)	9.4 (53)	3.4 (19)	15.8 (89)	27.8 (156)
q. スポーツ (ゲートボール等)	1.4 (8)	5.2 (29)	3.6 (20)	1.2 (7)	6.6 (37)	82.0 (461)
r. 病院 (治療のため)	3.2 (18)	11.7 (66)	36.1 (203)	12.8 (72)	10.5 (59)	25.6 (144)
s. 病院 (見舞いや付き添い)	1.6 (9)	2.3 (13)	6.9 (39)	18.1 (102)	22.2 (125)	48.8 (274)

表3. ライフスタイル尺度のレンジ・標準偏差・信頼性係数

	レンジ	標準偏差	α係数
1. 地域参加型活動尺度	- 2.611 ~ 15.3100	3.401	0.7096
2. 都市型趣味活動尺度	- 6.168 ~ 12.004	3.510	0.6158

表4. ライフスタイル尺度と属性との関連

	地域参加型活動尺度 平均値/F検定	都市型趣味活動尺度 平均値/F検定
(1) 居住地		
台東区 (272)	0.2729 NS	-0.7423 ***
目黒区 (290)	-0.2556	0.6987
(2) 学歴		
低学歴 (164)	0.2514 NS	-1.4711 ***
中学歴 (239)	0.0945	0.2999
高学歴 (155)	-0.4091	1.0833
(*無回答4ケースを集計から除外)		
(3) 世帯収入		
低収入 (111)	0.1289 NS	-0.8803 **
中収入 (209)	0.2110	-0.1265
高収入 (171)	-0.2904	0.8434
(無回答71ケースを集計から除外)		

***0.1%, **1%, *5%の有意水準 (以下同表記)

次にこの二つの尺度と、居住地、学歴、世帯収入との関連をみたのが表4である。地域参加型活動尺度に関しては、F検定の結果、特に有意な関連はみられない。しかし、傾向としては、「台東区」「低学歴」で高く、「高学歴」「高収入」で低い傾向がありそうである。都市型趣味活動尺度に関しては、居住地、学歴、世帯収入ともF検定で有意な関連を示し、「目黒区」「高学歴」「高収入」で相対的に頻度が高い。二つの尺度で表されたライフスタイルが、そもそも階層によって規定されている可能

性にも注意する必要がある。

③モラル尺度

本稿で、高齢者の「生き生きとした」生活の一面を測るのに使用するPGCモラル尺度は、高齢者の幸福感を測定するために多く利用されており、多次元から捉えられる高齢者のモラルを一次元の得点で表すことを目的とした尺度である⁽⁷⁾。モラル尺度を構成する各質問項目の単純集計を表5に示す。

表5. モラル尺度各項目の単純集計 % (実数)

1. あなたは自分の人生が年をとるにしたがってだんだん悪くなってゆくと感じますか。
 1. はい13.3 (75) ② いいえ77.2 (434) 3. わからない 9.4 (53)
2. あなたは現在、去年と同じくらい元気があると思っていますか。
 - ① はい68.3 (384) 2. いいえ30.1 (169) 3. わからない 1.6 (9)
3. さびしいと感じることがあります。
 1. はい22.6 (127) ② いいえ76.3 (429) 3. わからない 1.1 (6)
4. ここ1年くらい、小さなことを気にするようになったと思いますか。
 1. はい18.1 (102) ② いいえ80.4 (452) 3. わからない 1.4 (8)
5. 家族や親戚や友人との行き来に満足していますか。
 - ① はい88.1 (495) 2. いいえ8.2 (46) 3. わからない 3.7 (21)
6. 年をとって前よりも役に立たなくなったと思いますか。
 1. はい34.2 (192) ② いいえ61.2 (344) 3. わからない 4.6 (26)
7. 心配だったり、気になったりして眠れないことがありますか。
 1. はい30.2 (170) ② いいえ69.4 (390) 3. わからない 0.4 (2)
8. 年をとるということは若い時に考えていたより、よいと思いますか。悪いと思いますか。それとも同じだと思いますか。
 - ① よい22.8 (128) 2. 悪い・同じ62.3 (350) 3. わからない 14.9 (84)
9. 生きていても仕方ないと思うことがありますか。
 1. はい12.5 (70) ② いいえ85.1 (478) 3. わからない 2.5 (14)
10. 若い時とくらべて、今の方が幸せだと思いますか。
 - ① はい59.4 (334) 2. いいえ21.4 (120) 3. わからない 19.2 (108)
11. 悲しいことがたくさんあると思いますか。
 1. はい11.9 (67) ② いいえ85.4 (480) 3. わからない 2.5 (14) *無回答0.2 (1)
12. 不安に思うことがたくさんありますか。
 1. はい21.9 (123) ② いいえ75.4 (424) 3. わからない 2.5 (14) *無回答0.2 (1)
13. 前よりも腹を立てる回数が多くなったと思いますか。
 1. はい19.8 (111) ② いいえ76.9 (432) 3. わからない 3.2 (18) *無回答0.2 (1)
14. 生きることは大変さびしいと思いますか。
 1. はい62.5 (351) ② いいえ31.9 (179) 3. わからない 5.5 (31) *無回答0.2 (1)
15. 今の生活に満足していますか。
 - ① はい85.1 (478) 2. いいえ10.3 (58) 3. わからない 4.4 (25) *無回答0.2 (1)
16. 物ごとをいつも深刻にうけとめる方ですか。
 1. はい36.3 (204) ② いいえ57.8 (325) 3. わからない 5.7 (32) *無回答0.2 (1)
17. 心配ごとがあるとすぐおろおろする方ですか。
 1. はい22.4 (126) ② いいえ73.0 (410) 3. わからない 4.4 (25) *無回答0.2 (1)

今回の分析では、慣例にならない、より幸福感の高い回答（表中に○印で表示）に1点を与え、その数を足し上げるという方法によって17項目をもって一つの尺度として利用する（平均値11.8）。しかし、モラール尺度は、多次元性を前提としており、従来の研究では、「老いについての態度」（A, B, F, H, J）、「孤独感・不満足感」（C, E, I, K, N, O）、「心理的動揺」（D, G, L, M, P, Q）の3因子を取るという報告（Lawton,1975）が一般的であり、また、最近の日本における研究では、「楽天的・積極的気分」（K, L, O, C, I, E, N, M）、「心理的安定」（Q, P, D, G）、「健康感・有用感」（B, F, A）、「老化に対する態度」（J, H）の4因子構造が見られたという報告（前田他、1989）などがある。しかし、本稿で扱うデータについて、主因子法の因子分析を行い、固有値1以上の因子を抽出してバリマックス回転をしたところ、第一因子がK, A, L, C, I, Oの各項目、第二因子がG, D、第三因子がP, Q, N、第四因子がJ, H, M, E、第五因子がB, Fという、既存の研究と異なり、単純な解釈を行うことが困難な因子構造が見られた。そのため今回の分析では、モラルの下位次元での尺度を構成することはせず、各項目ごとに分析した結果のうち、特に関連が認められる項目を紹介するに留める。

表6. モラール尺度と居住地・階層との関連

	平均値/F検定	
(1) 居住地		
台東区 (272)	11.7	NS
目黒区 (290)	11.8	
(2) 学歴		
低学歴 (164)	11.6	NS
中学歴 (239)	11.7	
高学歴 (155)	11.9	
(*無回答4ケースを集計から除外)		
(3) 世帯収入		
低収入 (111)	10.7	***
中収入 (209)	11.7	
高収入 (171)	12.5	
(*無回答71ケースを集計から除外)		

居住地、学歴、世帯収入とモラール尺度との関連をみたのが表6である。この表から、モラール得点は居住地、学歴とは有意な関連を示さないが、世帯収入とは有意な関連を示し、高収入になるほどモラール得点が高くなる傾向が読み取れる。

尚、各質問項目について1%有意水準以上で世帯収入と関連するものをあげておくと、A、(老いの態度)、C, I, K, O (以上、孤独・不満足感)、L (心理的動揺)の6項目であり、このデータの因子分析における第一因子を構成する諸項目で、世帯収入が多いほど幸福感の高い回答をする率が特に高くなる傾向がみられた。

3. 分析

3. 1 ライフスタイル尺度とモラール尺度との関連

まず、本稿で設定した第一の問題、いかなる生活拡充行動でも、活発に（高頻度で）行っている高齢者ほどモラールが高いのか、という点を検討するために、上述した二つのライフスタイル尺度とモラール尺度との間の相関関係をみる。表7によるとモラール尺度と地域参加型活動尺度との関連は認められないが、都市型趣味活動尺度では関連が認められる。

表7. ライフスタイル尺度とモラール尺度との関連（ピアソン相関係数）

	地域参加型活動尺度	都市型趣味活動尺度
モラール度	.0520 (NS)	.1487 (***)

尚、モラール各項目をみると、都市型趣味活動尺度と関連（1%有意水準）する項目は、A, B, H (以上、老いの態度)、I (孤独・不満足感)、D, L, Q (心理的動揺)の7項目であった。都市型趣味活動尺度は世帯収入と関連し、高収入ほど頻度も高く、モラール得点も高いのであるが、都市型趣味活動尺度と世帯収入とでは、関連するモラール各項目

がそれほど一致するわけではないことを確認しておく必要がある。また、地域参加型活動尺度では、各項目別にみても関連するものは認められない。

この結果は、第一の問題が存在することを確認するものである。すなわち、必ずしもすべての生活拡充行動がモラルと関連するわけではない。都市型の趣味活動を頻繁に行っている高齢者は、モラルも高い傾向があるが、地域参加型の活動に関しては、それを頻繁に行っていようとモラルと関連しないのである。

3. 2 階層別のライフスタイル尺度とモラル尺度との関連

しかし、前節でみられた関連は、階層別に分けても同様の結果が得られるものであろうか。すなわち、いかなる人々にとっても、生活拡充行動を活発に（高頻度で）行っている高齢者ほど、モラルが高いと言えるのかという、本稿で設定した第二の問題についても検討しなければならない。そこで、ここでは学歴・世帯収入それぞれでサンプルを各カテゴリーに分割して、ライフスタイルの両尺度とモラル尺度との関連を分析する。

表8. 階層別・地域参加型活動尺度とモラル尺度との関連

	ピアソン係数/有意性検定	
(1) 学歴		
低学歴 (164)	0.2002	**
中学歴 (239)	0.0477	NS
高学歴 (155)	-0.1433	*
(*無回答4ケースを 集計から除外)		
(2) 世帯収入		
低収入 (111)	0.1582	*
中収入 (209)	0.0428	NS
高収入 (171)	-0.0079	NS
(*無回答71ケース を集計から除外)		

まず、地域参加型活動尺度について、各カテゴリーごとにサンプルを分割してモラル尺度との関連をみたのが表8である。この表より、「低学歴」「低収入」では正相関が認められ、「高学歴」では負相関が認められる。すなわち、この結果、社会階層によって、生活拡充行動とモラルとの関連が異なることが示されたと考えられよう。特に、「低学歴」と「高学歴」で、関連の仕方が逆転することは注目される。

尚、モラル各項目ごとに関連（1%有意水準）をみると、「低学歴」でL（心理的動揺）で正相関、「高学歴」でK（孤独・不満足感）で負相関が認められた。

表9. 階層別・都市型趣味活動尺度とモラル尺度との関連

	ピアソン係数/有意性検定	
(1) 学歴		
低学歴 (164)	0.2002	***
中学歴 (239)	0.1107	*
高学歴 (155)	0.1187	NS
(*無回答4ケース を集計から除外)		
(2) 世帯収入		
低収入 (111)	0.1432	NS
中収入 (209)	0.1053	NS
高収入 (171)	0.0842	NS
(*無回答71ケース を集計から除外)		

次に、都市型趣味活動尺度についてみたのが表9である。この表より、「低学歴」「中学歴」で正相関が認められた。また係数をみると、「低学歴」「低収入」層で関連がやや高くなる傾向がみられる。

尚、モラル各項目ごとに関連（1%有意水準）をみると、「低学歴」では、A,H（以上、老いの態度）、I,O（以上、孤独・不満足感）の4項目で正相関が認められるのに対して、「中学歴」ではA,B（以上、老いの態度）の2項目であった。

この結果は、ライフスタイル尺度とモラル尺度との関連が、すべての人々に同様にあてはまるわ

けではないことを示す。すなわち、第二の問題の存在を確認するものと考えられる。ライフスタイルとモラルとの関係は、社会階層によって異なっており、特に地域参加型活動尺度に関して、「低学歴」と「高学歴」で関連の仕方が逆転するという結果が示すように、ある人々にとっては適合的と思われるライフスタイルが、別の人々にとっては非適合的と考えられる場合もあるのである。

3. 3 地域による階層別のライフスタイル尺度とモラル尺度との関連

それでは以上の分析の結果は、都市全般に言えるものであろうか。それとも目黒区と台東区とで異なった傾向を示すのであろうか。そこで、ここでは地域別に分けたくえて、学歴・世帯収入それぞれでサンプルを各カテゴリーに分割して、ライフスタイル尺度のモラル尺度との関連をみる。

表10. 台東区・目黒区別のモラル尺度と階層との関連

	台東区 平均値/F検	目黒区 平均値/F検定
(1) 学歴		
低学歴(113/51)	11.83 NS	-0.8499 NS
中学歴(108/131)	11.31	0.0883
高学歴(49/106)	12.10	-0.4011
(*無回答4ケースを 集計から除外)		
(2) 世帯収入		
低収入(57/54)	10.53 ***	0.0677 ***
中収入(109/100)	11.54	0.3163
高収入(71/100)	12.79	-0.8256
(*無回答71ケースを 集計から除外)		

まず、地区別に、モラル尺度、地域活動尺度、趣味活動尺度それぞれの得点をみたのが、表10～表12である。モラル尺度をみると(表10)、両地区とも世帯収入で有意な関連が認められ、ともに「高収入」でモラルが高い。地域参加型活動尺度をみると(表11)、目黒区の世帯収入のみに有

意な関連が認められ、「中収入」で相対的に頻度が高い。

表11. 台東区・目黒区別の地域参加型活動尺度と階層との関連

	台東区 平均値/F検	目黒区 平均値/F検定
(1) 学歴		
低学歴(113/51)	0.7482 NS	-0.8499 NS
中学歴(108/131)	0.1020	0.0883
高学歴(49/106)	-0.4265	-0.4011
(*無回答4ケースを 集計から除外)		
(2) 世帯収入		
低収入(57/54)	0.1870 NS	0.0677 *
中収入(109/100)	0.1145	0.3163
高収入(71/100)	0.4635	-0.8256
(*無回答71ケースを 集計から除外)		

表12. 台東区・目黒区別の都市型趣味活動尺度と階層との関連

	台東区 平均値/F検	目黒区 平均値/F検定
(1) 学歴		
低学歴(113/51)	-1.7109 ***	-0.9397 ***
中学歴(108/131)	-0.2865	0.7834
高学歴(49/106)	0.4183	1.3928
(*無回答4ケースを 集計から除外)		
(2) 世帯収入		
低収入(57/54)	-1.8906 ***	0.1862 NS
中収入(109/100)	-1.1095	0.9449
高収入(71/100)	0.8465	0.8413
(*無回答71ケースを 集計から除外)		

都市型趣味活動尺度をみると(表12)、台東区の学歴、世帯収入、目黒区の学歴で有意な関連が認められる。両地区とも「高学歴」で相対的に頻度が高い。また、台東区では「高収入」で相対的に頻度が高い。目黒区の世帯収入でも、F検定で有意な関連は認められないが、傾向としては「低収入」

ない。

ここでも、モラル各項目ごとに関連（1%有意水準）をみておくと、台東区の「低学歴」でH（老いの態度）、I,O（以上、孤独・不満足感）の3項目、台東区の「中学歴」でF（老いの態度）、台東区の「低収入」でI,K（以上、孤独・不満足感）の2項目、目黒区の「低学歴」でA（老いの態度）などである。

この結果は、地域によって、階層によるライフスタイル尺度とモラル尺度との関連が必ずしも同一ではなく、社会階層を論じるためには、その階層が存在する地域社会との関連で検討する必要があることを示している。

4. 知見のまとめと考察

本稿では、生活拡充行動に注目して、地域活動尺度と趣味活動尺度とを作成し、ライフスタイルの指標し、この2尺度とモラル尺度との関連を、特に、社会階層、地域に注目しつつ分析した。以下、ここでの分析の主要な知見を整理してみる。

①ライフスタイルとモラル：全サンプルについて、この二つの尺度とモラル尺度との関連をみると、都市型趣味活動尺度は有意な正相関が認められるが、地域参加型活動尺度は関連が認められない。この結果、生活拡充行動の種類によって、モラルとの関連は異なることが確認された。

②社会階層ごとの分析：次に、階層ごとにライフスタイルの両尺度とモラル尺度との関連をみると、地域参加型活動尺度については、「低学歴」で有意な正相関が認められたが、逆に「高学歴」では有意な負相関が認められるなど、階層によって関連の仕方が同様ではなかった。都市型趣味活動尺度についても、低階層ほど強く関連する傾向がみられた。この結果、ライフスタイルとモラルの関連は、階層によって一様ではないことが確認された。

③居住地域ごとの分析：さらに、目黒区と台東区にサンプルを分けて同様の分析を行ったところ、地域参加型活動尺度については、台東区の「高学歴」「高収入」でも正相関の傾向がみられるのに対して、

目黒区の「高学歴」「高収入」では有意な負相関が認められた。また、低階層ほど強く関連する傾向がみられた都市型趣味活動尺度についても、目黒区の「低収入」で関連が低い。社会階層によるライフスタイルとモラルの関連は、大都市の中の地域によっても同様ではないことが確認された。

それでは、ここで得られた知見が、高齢者が大都市のなかでいかにしたら「生き生きとした」生活をおくれるのかという問題、そしてこの問題を探究していくために要請しているものは何であろうか。以下この点について考察を加えてみたい。

もっとも考察においては、今回の分析が中間報告の域をでるものではなく、多くの問題点を残したままであることも確認しておかねばならない。まず第一に、ここでの指標の不十分さについては言及しておく必要があるだろう。ライフスタイル尺度については、データからまったく恣意的に作成したものであり、今後さらに論理的検討が必要なことは言うまでもない。また、階層の指標、モラルの指標についても問題なしとは言えない。階層の指標については、職種を分析に含めていないなど、社会階層の指標として不十分なものであった。さらに、その区分は恣意的であり、現実に存在する（存在するかどうかということ自体、大きな問題があるが）カッティングポイントを反映していない恐れのあることは否めない。また、モラル尺度についても、多次元性を前提する尺度ながら本稿では一次元の尺度として分析し、その多次元性を十分生かすことができず、実際のところ何を測定しているのか不明確な点が残るという問題がある。第二に、性差、就業状況などの変数を分析から除外していることで、ここでの知見の背後にある重要な要因を見逃す恐れのあることも意識しておかねばならない。

しかし、以上のような問題を抱えているとはいえ、本稿の知見の重要性はなお残るであろう。本稿の知見は、高齢者の「生き生きとした」生活を考えていくために、活動理論の単純な援用は危険であり、活動の質、そして高齢者をセグリゲートする諸属性についての検討の必要を、明白に示しているのである。そしてまた、この結果は、なぜ

ある種の生活行動が、ある種の人々にとっては適合的であり、別の人々にとっては適合的でないのかという問題を提起する。

活動理論において、活動とモラルとの関連は、「活動度が大→役割支持が多→肯定的自我概念が多→モラル・生活満足度が高」という因果関係にあるものと考えられている(Lemon, et al, 1972)。すなわち、ある種の活動がモラルの高さと関連するには、その活動が当人にとって、役割支持と肯定的自我概念を与えるものでなければならない。そして、ある種の活動が、当人に役割支持と肯定的自我概念を与えるためには、その人の所属する階層の価値体系が、その活動と適合的であることを要請する⁽⁸⁾。このように考えるならば、本稿の知見は、高齢者が学歴や世帯収入という社会経済的地位と、彼らが生活する地域によって区分される社会階層により異なった価値意識をもち、異なった価値体系を受け入れていることを示唆している。例えば、地域活動的なライフスタイルは、台東区の低階層にとっては、彼らの価値体系とかなり適合的であるが、目黒区の高階層とは非適合的と考えられるのである。この結果は、高齢者の属性を無視しての地域参加重視型高齢者対策の有効性に疑問を投げかけるものであろう。

それでは、ある種のライフスタイルが、価値に照らして適合的となるメカニズムはどのように考えたらよいのであろうか。最後に、不十分ながらこの点について、二つの仮説的な考えを示しておきたい。一つは「少数派ライフスタイル非適合仮説」とでも呼べるであろうか。所属する階層における一般的なライフスタイルを取らない(取れない)ことによって、活動度の大きさが、役割支持と肯定的自我概念を否定的に作用する場合である。もう一つは「ブランド品ライフスタイル適合仮説」とでも呼べるであろうか。上位の階層において一般的なライフスタイルを取ることによって、活動度の大きさが、役割支持はともかく、肯定的自我概念にプラスに働く場合である。今回の分析から、これらの仮説を検証することはできないが、その傍証となる可能性のある点を取上げて指摘するならば、地域参加型活動尺度に関して、その頻度が比較的

高い台東区の「低収入」「高収入」でモラルと正の相関を示し、頻度が比較的小さい目黒区の「高収入」でモラルと負の相関を示すことは、第一の仮説の根拠となる可能性をもつと言えよう。また、都市型趣味活動尺度が、高階層で比較的頻度が高く、なおかつ低階層でモラルと比較的正の相関が高いことは、第二の仮説の根拠となる可能性をもっていると言えないであろうか。

本稿での分析は探索的な域をでるものでなく、ライフスタイルとモラルの関連についても、モラルがライフスタイルを規定するという方向も無視できないが、いずれにしても高齢者の「生き生きとした」生活のライフスタイルを考えていくためには、高齢者は一様な集団として捉えることは困難であり、社会階層、居住する地域社会によって異なった「生き生きとした」生活をもつ人々として捉え直す必要のあることはあらためて確認されたと言えよう。高齢者は、年齢によってセグリゲートされる共通の社会階層に所属するものであったとしても、そこにはすべての価値までも共有する必然は存在しない。ある個人が一定の価値意識を形成するには、その生活する(してきた)社会経済的地位に基づく階層や地域社会の規定力が大きいと考えられる。高齢者になったからと言って、その属する階層や地域社会の規定力から解放されるものではない。むしろ長い年月身につけてきた価値意識は、高齢者になって固定的なものとなる場合さえあるであろう。高齢者のライフスタイルと「生き生きとした」生活との関連を問うためには、今後さらに社会階層や地域社会における下位文化・価値体系への視座が必要なのではないだろうか。

注

1) 生活拡充行動は別の言い方をすれば所謂、余暇活動に近い。老年期の余暇活動の特徴の一つに、野島正也(1981)は「余暇の課題性」をあげ、余暇が老年期における生活の中心的価値(生き甲斐や生活のハリ)が求められる場であると述べ、高齢者にとっての余暇の重要性を指摘している。また、高齢者の生活を余暇活動の面から捉えた研究としては、長谷川倫子(1988)の

定年前後の余暇活動の変化に関する分析がある。彼女は余暇を「趣味活動」「学習活動」「家庭内活動」「休息・気晴らし活動」の4タイプに分類している。本稿では、余暇が「休息・気晴らし活動」のような非活動的な活動を含む概念であるのに対して、より能動的な側面を重視する意味で生活拡充行動という言葉を使用した。

2) ライフスタイルを分析する場合、対象者の行動パターンをもとにライフスタイル・クラスターを構成して分析する場合が多い(例えば、松本、1986、浜口ら、1990)が、本稿では、対象者のあるライフスタイルへの近似度をみるという視点から、行動パターンの尺度構成をするに留まった。

3) 活動理論の日本への詳しい紹介については袖井孝子(1981)を参照のこと。尚、本文では、その簡単な要約を奥山正司(1986)から引用した。

4) 例えば、古谷野亘(1983)、藤田利治他(1989)など。尚、藤田らも、「社会的活動性」を「趣味の会など任意集団での活動」、「近所との対人関係」、「親しい人の訪問」など対人関係を主とした項目から構成している。

5) 両地区の差異について本稿での分析と特に関連しそうな項目について簡単に紹介しておく。まず、50歳の職種に関して、就業者中「自営業・家族従業員」が台東区では61.8%に対して目黒区で34.5%、「管理的職業」が台東区で7.3%に対して目黒区で24.7%、「専門・技術的職業」が台東区で6.2%に対して目黒区で13.2%と、両地区で職業構成に大きな違いがある。また、居住歴でも目黒区のほうが比較的新しい住民が多い。このような違いが、両地区の地域性の差異に大きな影響を及ぼしていることは容易に想像できる。

6) これらの項目のうち、A~Jの各項目は、かつて筆者が、余暇活動の中でも「学習・文化活動」に関する項目として分析したものである(木下、1990)。また、a~sの各項目は外出行動に関する項目として設定されたものである。これらの項目についても既に中林一樹(高橋他、1990)による報告がある。

7) モラール尺度に関する詳細な紹介および日本における研究は、東京都老人総合研究所を、中心に活発に行われている(例えば前田他、1979、1989、古谷野ら、1989、などを参照のこと)。また、本稿と同一のデータを用いて、直井道子は、高齢者の基本属性や交際行動

とモラールとの関連を検討している(直井、1990)。

8) 価値意識の重要性の指摘は何も新しいものではない。例えば、ニューガルテンら(Neugarten, B.L., al. 1961)は、実際の活動や社会参加の量よりも、個人が自分の準拠点としてそれらをどう評価しているかに注目している。

文 献 一 覧

- 浜口 春彦・嵯峨座春夫・店田廣文・臼井恒夫(編)
1990 『山地・平野2都市の高齢者調査—埼玉県秩父市・所沢市の比較—』早稲田大学人間総合研究センター。
- 長谷川倫子
1988 「定年後における中高年の余暇活動の変化」『社会老年学』No. 28, pp. 31-44。
- 藤田 利治・大塚俊男・谷口幸一
1989 「老人の主観的幸福感とその関連要因」『社会老年学』No.29, pp.75-85。
- 木下栄二・高橋勇悦
1990 「大都市高齢者の学習・文化活動」『総合都市研究』39号, pp.131-148。
- 古谷野 亘
1983 「モラールに対する社会的活動の影響—活動理論と離脱理論の検証—」『社会老年学』No.17, pp. 36-49。
- 1989 「PGCモラール・スケールの構造—最近の改訂作業がもたらしたもの—」『社会老年学』No.29, pp. 64-74。
- Lawton, M. P.
1975 "The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale: A revision." *Journal of Gerontology* 30: 85-89.
- Lemon, B. W., Bengton, V. L. and Peterson, J. A.
1972 "An exploration of the activity theory of aging: Activity types and life satisfaction among in-movers to a retirement community." *Journal of Gerontology* 27: 511-523.

松本 康

1986 「ライフスタイルの展開」『伝統型消費都市における都市的生活構造の研究(科研費報告書)』, pp.84-100。

奥山 正司

1986 「高齢者の社会参加とコミュニティづくり」『社会老年学』No.24, pp.67-82。

前田大作・浅野仁・谷口和江

1979 「老人の主観的幸福感の研究—モラル・スケールによる測定の試み—」『社会老年学』No.11, pp.15-31。

前田大作・野口裕二・玉野和志・中谷陽明・坂田周一・

Jersey Liang

1989 「高齢者の主観的幸福感の構造と要因」『社会老年学』No.30, pp.3-16。

直井 道子

1990 「都市居住高齢者の幸福感」『総合都市研究』39号, pp.149-159。

Neugarten, B. L., Havighurst, R. J. and Tobin. S. S.

1961 "The measurement of life satisfaction." *Journal of Gerontology* 16: 134-143.

野島 正也

1981 「老人の余暇活動」副田義也(編)『講座老年社会学I(老年世代論)』垣内出版 pp.166-194。

袖井 孝子

1981 「社会老年学の理論と定年退職」副田義也編『講座・老年社会学I』, pp.102-140。

高橋勇悦・森岡清志・中林一樹・木下栄二

1990 「大都市高齢者の文化創造に関する調査の概況」『総合都市研究』39号, pp.103-130ページ。

Key Words (キー・ワード)

Elderly in Metropolitan Area (大都市高齢者), Life Style (ライフスタイル), PGC Morale Scale (モラル), Social Stratification (社会階層), Regional Characteristics (地域性)

LIFE - STYLE AND MORALE OF THE ELDERLY IN THE METROPOLITAN AREA

Eiji Kinoshita*

*Momoyama Gakuin University

Comprehensive Urban Studies, No. 45 1992, pp. 53~67

This paper is a preliminary study of the relation between the life - style of the urban elderly and their morale. The analysis is based on data from the "Survey on the Creation of Culture by the Urban Elderly" carried out in the wards of Meguro and Taito in the summer of 1989. From the questions referring to "life - enhancing behavior" we established two types of life - style measurements as variables for the analysis - the *urban leisure activity scale* and the *community involvement scale*. The P. G. C. Morale Scale was used for the morale index number. We analyzed and examined the relation of two life - style scales to the morale scale, with an eye on social stratification (academic careers and household income) and areas of residence. Our main results are as follows :

1. All samples showed significant correlation between morale and urban leisure activity, but not between morale and community involvement.
2. Correlation between the two life - style scales and the morale scale differed with social strata. In particular, it is interesting that the correlation with community involvement was, while significant, strongly positive for low, but negative for high academic background. Correlation with urban leisure activity was also stronger for lower social strata.
3. Separate but identical analyses of the Meguro and Taito Ward samples revealed that correlation with community involvement scale for high academic background and high income tended to be positive for Taito Ward, but significantly negative for Meguro Ward. Although correlation with the urban leisure activity scale tended to be strong for lower social strata, for Meguro Ward the correlation was weak for low income. The influence of social stratification on the relation between life - style and morale was not identical for all areas within the Metropolis.

Finally, with the above insight, we contemplated on the relation between life - style with the value system that is determined by social stratification that segregates the elderly.